

式 辞

本日ここに、厚真町120年記念式典を執り行うにあたり、衆議院議員堀井学様をはじめ、北海道議会議員神戸典臣様、北海道胆振総合振興局長本間研一様並びに姉妹都市であります岩手県奥州市市長小沢昌記様などのご来賓の方々のご臨席と町民多数のご出席を賜りましたことは、この上ない喜びであり、深く感謝を申しあげる次第であります。

厚真町は、明治30年、苫小牧ほか6ヶ村戸長役場から分離独立し、地方自治体としての歩みを始め、本年で120年の節目を迎えました。先達は鬱蒼とした未開の山林原野を切り拓き、厳しい自然気象と向き合いながら、窮乏に耐え額に汗して夢と希望をつぐみ、厚真の地に根を下ろしました。世代が変わり途方もない歳月が流れる中、築き上げ、守ってきた豊かな森と海、黄金色に輝く田園は、町民のかけがえのない財産として私たちに引き継がれています。

今ある肥沃な耕地と社会基盤は、本町の持続的発展を支えてきたものでありますが、さらなる生産力拡大とより安全な地域社会を目指して、厚真川広域基幹河川改修事業が昭和49年着手、厚幌ダム建設が平成7年着工、道営ほ場整備事業が平成10年採択、国営土地改良事業が平成12年着手、統合簡易水道事業が平成18年に着工し、それぞれの事業が関係機関のご努力と地域住民のご協力により、早期完成を目指して槌音高く進められています。昨年8月には、町民の悲願でありました厚幌ダム建設の定礎式が、高橋はるみ北海道知事を迎えて厳かに執り行われました。これらにより町民の期待は大いに高まり、新たな飛躍に向けてICT技術を活用したスマート農業など様々な取り組みを進めているところであります。いずれも、先人が築き上げてきた礎があったからこそであり、改めて、先人のご功績に敬意を表する次第であります。

厚真120年の歴史を顧みますと、本町の確かな経済基盤を支える第一次産業は、まさに開拓に情熱を傾けられた先達、先人の一鍬、一斧に、手塩にかけた一坪、一坪に由来します。先人の創業期においては、農業は未だ技術的に本道の適性に適合できず、また、厚真川及び支流域とも自然河川のままであったことから、当然ながら大凶作と洪水被害が度々であり、農業を目指す移住者にとっては困難を極めていた時代でありました。戸長設置当時の明治30年の人口は2,152人、田が105町、畑が187町でありながら、翌年の開拓移住予定者は150戸、750人と厚真村史に記されているように、開拓者らは広大な大地に未来を託し、困難を極め

ながらも役場庁舎、小学校建設、幹線道路整備と村民一丸となって、厚真村建設に力強く歩み出したのであります。当時は、北海道全体がそうであったように林業や漁業が地域経済を支えていましたが、厚真村は、ほかに早くから石油や石炭の採掘が注目されており、その後の発展期を特徴づけるものとなりました。

創業期の前後に日清戦争、日露戦争があり、村勢の伸張が始まる大正3年に第1次世界大戦が勃発します。その間の明治39年には2級町村制が施行され、戸長制度から厚真村となり、大正4年には苫小牧に先んじて早くも一級町村制に移行し、その発展ぶりは目覚ましいものがあつたようであります。翌大正5年の人口は7,484人と記されています。

創業期から第1次世界大戦前夜までは、農業の発展は不十分なものでありましたが、品種改良や土地改良の努力と大正2年の農会技術員の配置に続いて、大戦の穀物ブームにより農村経済は膨張し、農業黄金期を迎えることになりました。その頃の客土法は厚真村で発見されたものであり、改良されその成果は全道に広がっていききました。

大正14年には開村30周年記念式が挙行されましたが、引き続き水田開拓の情熱は厚く、伸展の機運も高く、その声価から昭和4年には本村農会会長が全国大会で演説する栄誉に浴することになりました。しかしながら、世界的に政治経済や食糧生産量は不安定で、農村経済は好況と不況を繰り返し、農業恐慌に見舞われる昭和9年頃は窮乏の頂点に達することになります。その停滞した空気を変えたのは、昭和12年に勃発した支那事変でありました。窮乏から清貧へと精神や経済の統制が進み、農村も戦力・生産増強にまい進することになります。

戦後は、全国的な食糧不足の中、本村は冷害凶作が続く中にあつても一丸となって増産と供出に努め、供出割り当ての完納を広く讃えられました。様々な制度・秩序が一変した時代の中で、最も大きな改革は農地制度改革であり、これにより不在地主の耕作地が解放され、小作農民の増産意欲の高揚に繋がりました。昭和30年における耕地面積3,571町のうち、農地改革により譲渡された面積はその5割を超える1,829町でありました。

昭和22年には普通選挙が執行されるなど地方自治制度も大きく変わり、新時代の息吹を感じながら、戦後の農村復興に努めていた矢先の昭和24年11月に、厚真市街地において開村以来の未曾有の大火災が発生し、また、昭和27年の十勝沖地震では、庁舎をはじめ多くの家屋が倒壊しました。それでもなお、翌年には庁舎の建て替えが行われ、その威容は北海道町村の中で1番であつたと記されています。

厚真川の治水は開村以来の町民の悲願でありましたが、様々な運動が功を奏し、第1次河川改修が昭和11年から北海道により施工され、戦時下や洪水、用地買収や移転補償など、数々の困難を極めながらも昭和30年に完成しました。この間、昭和23年から同27年までの5か年にわたり、札幌刑務所囚人150名が名誉作業隊として改修作業に従事しています。同時期に道内の他の河川についても改修工事が進められていましたが、その多くは、数々の障害により中断を余儀なくされ、完成したものはごく僅かとの記録があります。村史における偉業として語り継がれる河川改修事業ですが、ひとえに、亀井喜久太郎、大岩信一郎氏など村政指導者の苦心努力と関係各位の尽力と協力によるものであり、村民の団結力の賜物であります。

戦後、人口が1万人を超えるようになり、産業的にも農業を中心として隆盛であることから、町民の福祉の増進、町勢のさらなる発展伸張を期し、昭和34年に村議会での議決を受けて北海道に対して陳情を行い、翌昭和35年には町制が施行されました。

町史における偉業の一つに国営かんがい排水事業があります。農業を基幹産業とする本村にとって、待望の当該事業が昭和34年に全体設計着手、昭和37年に着工となりました。受益面積は開拓600㌦を含めた3,234㌦、頭首工6区9区の2か所、厚真ダム総貯水量10,080,000^m、揚水機場9区1か所、排水路4水路の大規模開発事業となり、9年の歳月を経て、昭和45年に完成しました。関連事業として道営、団体営かんがい排水事業が施工され、農業経営の規模拡大に資することになりましたが、食糧事情の変化から、時を同じくして、国による全国的な余剰米対策としての生産調整が始まることとなりました。

また、昭和40年代には、日本の高度経済成長を背景として勇払原野を中心に苫小牧東部大規模工業基地開発が決定され、厚真町も純農村から農工両全の町へと転換することになりました。本町域には、苫東厚真発電所をはじめとし、石油備蓄基地などが立地し、また、苫小牧港東港が開港し、エネルギー供給基地として、あるいは物流基地として本道の発展の一翼を担う地域となりました。

昭和50年代以降は、道路の改良・舗装、橋梁の整備、上下水道の普及整備、各家庭への防災行政無線の設置など、社会基盤の整備が目覚ましく進み、苫小牧港東港への新日本海フェリーの就航、日本ホワイトファーム札幌食品工場の進出、大規模太陽光発電施設の開設が相次ぎ、近年は人口減少社会の到来を見据えた移住・定住促進のための住宅分譲地の整備を進めるなど、町民生活の利便性、快適性が一段と

高まってきております。

教育文化の面においても、学校建設をはじめとする教育環境の整備、生涯学習活動の推進、体育施設が建設されるなど、生涯学習環境の整備とともにグローバル化社会に対応する英語教育活動の推進が図られています。また、高齢者の皆さんが地域で安心して暮らすことができるよう、循環福祉バスの運行やデイサービスセンター、高齢者グループホーム・生活福祉センターなどのほか、子育て支援住宅の建設や認定子ども園の開設など、若い世代から高齢世代まで幅広くきめ細かな社会福祉を目指してまいりました。

こうして、厚真の歴史を振り返るとき、常に人々を温かく見守り、時には厳しい試練を与えながらも、共に息づいてきたこの大地と自然の存在があることに気付かされます。とりわけ本町の中心部を縦断し太平洋へと注ぐ母なる厚真川は、一次産業を中心とする穀倉地帯としての発展を支えてきました。第1次河川改修がなされたとはいえ、それでもなお、恵みをもたらす厚真川は、時には大雨により氾濫し、その泥流は大地を飲み込み、収穫の秋を奪ってしまうこともありました。

ふるさと“あつま”の歴史は、厚真川との戦いの歴史でもあり、町民の生命財産を守る抜本的な治水対策、農業用水と水道用水の安定確保は町民の悲願でありました。その中核となる厚幌ダムは、第2次河川改修とともに着実に建設が進められ、平成31年には供用開始となります。現在進められております国営農業用水再編対策事業、道営ほ場整備事業と併せ、しなやかで力強い農業・農村づくりに向けて多大な効果が期待されるところでございます。

明治、大正、昭和、平成の4つの時代を経ながら厚真町は着実な歩みを続けております。今、私たちには、この地に生きる厚真人として、これまで受け継いできた資産・資源にいつそう磨きをかけ、次代に引き継いでいかなければならない使命があり、私たちの眼前には、「地方創生という次なる挑戦」が待ち受けています。悠久の歴史と厚真町120年の足跡に思いを馳せ、食料とエネルギーと環境が整う潜在力に満ちあふれたこの“ふるさと厚真”で、「みんなが輝き、支持され選択されるまち、住み続けたい安全・安心なまち“あつま”」を目指し、町民の皆さんの夢と希望を結集し、その先へ挑戦し続けてまいります。

ご臨席をいただいておりますご来賓の皆様には、今後とも本町発展のために、変わらぬご指導とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、本日の記念式典において、本町の自治振興、産業振興、社会福祉、教育振興など、町勢の発展に各分野で多大な貢献をされた方々に対し表彰状を贈呈させて

いただきます。本年度受賞者の皆様のごこれまでのご努力に心から感謝申し上げますとともに喜びを申し上げます。今後とも、本町発展のためにご協力をいただきますよう、心からお願い申し上げます。

さて、本年は8月に入り多数の台風が本道に上陸あるいは接近し、各地に大きな被害をもたらしました。北海道と名付けられて間もなく150年を迎える中、被災地もまた本町と同じ開拓の歴史を持つ地域ばかりであります。改めて、被災地の皆様に衷心よりお見舞い申し上げます。本町も浸水冠水や土砂流出など、少なからず損害を被りましたが、これまでと同様にみんなで協力し合い、再びこの試練を乗り越えてまいりたいと思います。

私たちは、勇払原野の風雪に耐え、たくましい精神と遠大な理想を持って、平和と繁栄の道を歩み続ける厚真の町民です。ここに改めて、本町の無限の可能性を信じ、みんなで手を携え「誇り高いまちづくりに努める」ことをお誓い申し上げます。

結びに当たり、本日の式典にご臨席を賜り錦上花を添えていただきましたご来賓の皆様にご心からお礼申し上げますとともに、厚真町の限りない発展と本日ご臨席を賜りましたすべての皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ、式辞といたします。

平成28年9月22日

厚真町長 宮 坂 尚市朗